

聖火リレールート苦慮

都道府県案 月末締め切り



津軽海峡を渡る青函連絡船「津軽丸」の甲板上で行われた聖火リレー
—1964年6月

2020年東京五輪の聖火リレーを巡り、各都道府県が大会組織委員会にルート案を提出する期限が今月末に迫っている。多くの市町村が誘致に手を挙げるが、限られた日数でくまなく回るのは困難。担当者は対応に苦慮しながら、調整に追われる。

1964年の前回東京大会は4ルートに分かれて全国をつないだ。34日間総距離は6万7555キロ、走者は総数10万人余り。今回は20

日数限られ 全域回れず

年3月26日に福島県を出発し、121日間で全国を巡る。東京都や東日本大震災の被災3県などを除く大半の39道府県に割り振られたのは2日間。1日約80人、1人当たり約200キロ、1日8時間程度といった目安があり、総距離は約2千キロと見込まれる。

避難者へ心配り

スタート地点の福島県。大震災や東京電力福島第1原発事故からの復興を世界に発信する重要な機会と位置付ける。事故による避難区域が残る沿岸部の自治体を中心にルート入りの要望があり、県も

最長15日間が割り当てられた東京都。全62市区町村を巡る順番が

東京 62市区町村全てを巡り、開港都市東京を世界にアピール

福島 復興に取り組みの様子を世界に発信

北海道 自然や開拓の歴史など魅力を効果的に発信

栃木 市町の提案で決定。日光市は世界文化遺産の日光東照宮などの社寺を想定

京都 古都の伝統文化や文化財をアピール

沖縄 ひめゆりの塔や平和祈念公園を通るルートで「平和」を発信

2020年東京五輪の聖火リレー 各自治体ルート選定のポイント

「被災地の現状発信」を念頭に検討を続ける。

だが「避難者の中には五輪という気分ではない人もいるかもしれない」（担当者）。実情に詳しい市町村と協議しながらリレーの実施方法を考えていくという。

前回のスタート地点、沖縄県は「平和」の発信を重視し、糸満市のひめゆりの塔や平和祈念公園周辺を通過するルートを考える。ただ離島の自治体も多く、どこまで巡回するのか頭を悩ませる。

6月下旬の3日間を受け持つ静岡県は既に、通過市町を決めた。ルート案は調整中で、世界文化遺産の富士山を望むコースも想定。

担当者は「梅雨の時期なので、せっかくの富士山が見えない可能性も」と気をもむ。

決まったが、既存の航路や空路で島々全てを回るのは時間的に難しい。特に小笠原諸島は都心から約千キロも離れ、飛行場もない。ある場所でも聖火を消すと同時に離島で点火する「瞬間移動」案の他、自衛隊の協力も探る。

さらに今回は、ランナーを挟むように数百人の車列を伴って移動し、毎日、数千人規模を収容できる会場で聖火到着セレモニーを実施する。担当者は「黙々と走った前回とは違い、盛り上げのためにお祭り騒ぎとなる。自治体の要望全てに応えるのは無理だろう」。

来夏ごろに公表

組織委は今月末までに、ルート案の提出を受ける。担当者は「コンセプトに合うのか、次の県のスタート地点に聖火を物理的に運べるのかを確認し、安全性も検証する。国際オリンピック委員会（IOC）の了承を経て来夏ごろにルートを発表したい」とする。

東洋学園大の本庄加代子准教授（マーケティング戦略）は「子どもからお年寄りまで楽しめる共通イベントなので、ルートの決定プロセスも含め、一人でも多くの参加意識を高められるかがポイントだ。参加者が多いほど盛り上がり、思い出として強いインパクトを残すことになるだろう」としている。